



Title	ボランティアツーリズム研究の動向および今後の課題
Author(s)	依田, 真美
Citation	国際広報メディア・観光学ジャーナル, 12, 3-19
Issue Date	2011-03-22
Doc URL	<a href="http://hdl.handle.net/2115/45203">http://hdl.handle.net/2115/45203</a>
Type	bulletin (article)
File Information	JIMCTS12_001.pdf



[Instructions for use](#)

## ボランティアツーリズム研究の 動向および今後の課題

北海道大学大学院国際広報メディア・観光学院博士後期課程  
依田真美

### Volunteer Tourism Research: Trends, Features, and Research Agenda

YODA Mami

abstract

Volunteer tourism has experienced rapid growth since the mid-1990s, mainly in North America, Europe, and Oceania. Academic research on volunteer tourism began in the early 2000s, and has gradually increased since then. Given the resulting accumulation of research, this paper tries to analyze the trends and features of volunteer tourism research, and proposes a future research agenda. In order to do so, the author examined peer-reviewed research papers in major journals, as well as academic books on volunteer tourism.

The analysis identified four key features of volunteer tourism, with the common theme being strong interest in the potential of volunteer tourism as a means to influence individuals and make positive changes in society. In addition, four research agendas are proposed, emphasizing the need for more holistic, contextualized, and comparative research.

# 1 はじめに

## 1.1. 研究の背景と目的

日常生活圏外でのボランティア活動を休暇に組み入れた「ボランティアツーリズム (volunteer tourism)」<sup>1)</sup>が、米国、ヨーロッパ、オセアニアを中心に新しい形の休暇の過ごし方として注目されている。英語圏ではボランティアツーリズムに特化したガイドブックやウェブサイトがあるほか、旅行雑誌*Condé Nast Traveler*でも特集が組まれた<sup>2)</sup>。しかし、日常生活圏外でのボランティア活動自体は新しいことではなく、国際ボランティア活動などの形で以前から存在していた。それにも関わらず、ボランティアツーリズムとして新たに注目を集めているのは、活動の内容や、行き先、期間などの選択肢が多様になり、より多くの人が参加しやすくなっているためである。

ボランティアツーリズムの参加者数は、1990年代後半から急増したと言われている (Callanan et al., 2005)。特に、大学や企業によるボランティア活動に対する評価が高まったことを理由に、米国、ヨーロッパ、オセアニアの「Gap year<sup>3)</sup>世代」の若者の参加が増えた (Callanan et al., 2005)。こうした参加者の増加を受けて、当初はNPO・NGOや教育機関、政府系機関などが中心だったプログラム提供や仲介への営利企業の参入も増加している (Tourism Research and Marketing, 2008)。

ボランティアツーリズムは、参加者であるボランティアと受け入れ地域双方にメリットのあるオルタナティブツーリズムの一形態として期待されてきた (Wearing, 2001; Callanan, et al. 2005)。しかし、参加者や関係者が増加したことで、逆にさまざまな問題を起こしているという指摘も、最近では出てきている (たとえばTrejos, 2009; Thorpe, 2009)。具体的には、ボランティアと受け入れ地域との文化摩擦や、ボランティアの技術不足などの問題である。このような地域への負の影響を最小限とするためには、ボランティアツーリズムの現状把握や課題解決に向けての議論や研究の充実が必要である。

ボランティアツーリズムにかんする研究は、2000年代に入ってから、徐々に蓄積が進んでいる。2001年にStephen Wearingがボランティアツーリズムにかんする初めての学術書を出版したことが<sup>4)</sup>、他の研究者の注目を集めるきっかけになったと考えられる。それ以降、2003年には*Tourism Recreation Research*がボランティアツーリズムの特集号を組み、2009年にはヨーロッパを中心とした学会のひとつであるAssociation for Tourism and Leisure Education (ATLAS) とオーストラリアのCouncil for Australian University Tourism and Hospitality Education (CAUTHE) が、世界で初めてのボランティアツーリズムだけをテーマにした国際会議を共同で招集するなど、同分野にかんする研究者の注目は高まってきている。

- ▶1 ボランティア休暇 (volunteer vacation, volunteer holidays) とも呼ばれる。
- ▶2 ボランティアツーリズムに特化したガイドブックとしては、ガイドブック大手のFrommer'sが*Frommer's 500 Places Where You Can Make a Difference*を出版しているほか、Bill MacMillon et al. (2009) *Volunteer Vacations: Short-Term Adventures That Will Benefit You and Others, 10<sup>th</sup> Revised Edition*, Chicago Review Pressなどがある。ウェブサイトとしては、仲介目的のwww.globalvolunteers.orgやwww.charityguide.orgなどがあるほか、調査研究成果の公表も含めた啓蒙・教育目的のサイトとして、www.voluntourism.comがある。また、高級志向の旅行雑誌である*Condé Nast Traveler*は、2008年5月にボランティアツーリズムの特集記事を掲載している。
- ▶3 Gap Yearとは、仕事や学業を離れ、異なる活動に従事するために送る一定期間を指し、米国や欧州、豪州では大学在学中や就職前に取得することが多い。Gap Yearを取得する学生はGap Year studentsやGappersと呼ばれる。
- ▶4 Wearing (2001): *Volunteer Tourism: Experiences That Make A Difference*, Wallingford, U.K.: CABI Publishing を指す。

このような研究者の注目の高まりは、ツーリズム研究において、ボランティアツーリズム研究の重要性が増していることを示唆していると考えられるが、2010年までに全体の傾向や特徴を分析した研究はまだない。そこで、本研究では、ボランティアツーリズム研究が、受け入れ地域と参加者であるボランティア双方にメリットのあるボランティアツーリズムの実現を促進できるように、これまでのボランティアツーリズム研究の傾向を明らかにし、その特徴を分析した上で、今後、分析すべきだと考えられる課題を提示する。

## 1.2. ボランティアツーリズムの定義

初めに、本研究が対象とするボランティアツーリズムを定義する。ボランティアツーリズムの定義で最もよく参照されるのは、Wearing (2001) による「自由時間においてさまざまな動機に基づき、社会における物的貧困の緩和、援助、また特定の環境の保護や社会や環境の調査などの組織化されたボランティア活動」<sup>5)</sup>である。しかし、Lyons et al. (2008) は、ボランティア活動とツーリズムが融合したボランティアツーリズムには曖昧さがあり、狭く厳格な定義を用いることは、ボランティアツーリズムにかんする重要な理解が妨げられる可能性がある」と指摘している。また、ボランティアツーリズムの「負の可能性」に着目して研究を進めたGuttentagは、ボランティアツーリズムの参加者を「旅行過程でボランティア活動に従事する旅行者であれば誰でも」と定義しており (Guttentag, 2009)、ボランティアツアーの構成要素を「旅行」と「ボランティア活動」に限定している。

本研究の目的は、ボランティアツーリズム研究の傾向の分析であるので、既存のボランティアツーリズム研究を出来るだけ広く網羅することが重要である。そのため、Lyonsらの指摘を考慮し、Guttentagと同様に、ボランティアツアーの最も基本的な要素を「ボランティア活動」と「旅行」とする。そして、それらを含む活動、すなわち、「ボランティア活動が旅程に含まれる旅行」をボランティアツーリズムと定義する。また、ボランティアツアーとボランティアツーリズムの区別にかんしては、通常の英語の用法通り、個別の行為を指す場合は「ボランティアツアー」、社会現象や形態を指す時は「ボランティアツーリズム」とする。

## 1.3. 研究方法

本研究で対象としたボランティアツーリズム研究は、2000年から2010年9月30日までに発行され、後述する学術論文データベースから検索、抽出したボランティアツーリズムにかんする査読論文と、書籍として出版された学術的著作である。

これまでの研究内容の傾向を把握するために、まず、抽出した論文を、その論文が分析対象とした主体ごとに分類し、さらに、主体ごとに研究テーマの主な内容をまとめた。加えて、研究方法や研究対象となった団体の活動内容についても分析した。その上で、これらの研究の特徴に対する考

▶5 日本語訳は、中村憲司、松本秀人、敷田麻実 (2008) : 「『労働』と観光が融合したボランティアツーリズムに関する研究」、『日本観光研究学会全国大会 学術論文集 2008年11月』、p.427による。

察を加え、今後の研究課題を明らかにした。

分析対象となる論文の抽出基準は、観光分野の主要な学術誌に掲載されている論文が対象となるように設定した。そのために、まず、Hall (2010) に掲載されている英国およびオーストラリアの専門家パネルの評価で上位となった学術誌17誌を抽出した<sup>6</sup>。そのうち、2005年に廃刊となった *Journal of Tourism Studies* と *Facilities* をデータベースによる検索対象から除き<sup>7</sup>、残りの15誌が網羅されるようにデータベースを選び、それらのデータベースに含まれる学術誌を対象に論文を抽出した。使用したデータベースは、EBSCOHost Academic Search Premier, InformaWorld, ingentaconnect, ProQuest Academic Research Library, Saga Journals Online, ScienceDirect, Wiley Online Libraryである。

さらに、これらのデータベースに含まれていないが<sup>8</sup>、2003年にボランティアツーリズム特集号を出した *Tourism Recreation Research* 誌と2009年に同特集号を出した *Annals of Leisure Research*<sup>9</sup> も論文抽出の対象に加えた。特に、特集号まで対象としたのは、ボランティアツーリズムは研究の萌芽期にあるので、一般誌に掲載される論文も特集号に集約されている可能性が高いと考えられるからである。

これらの検索対象に対し、「ボランティアツーリズム（または、略称であるボランツーリズム）」「ボランティアツーリスト（または、略称であるボランツーリスト）」「ボランティア休暇（volunteer vacation, volunteer holidays）」が題名またはキーワードに含まれている論文を本研究の分析対象とした<sup>9</sup>。これらの言葉を題名やキーワードに含まなくても、本研究のボランティアツーリズムの定義に該当する活動についての論文が存在する可能性があるが、ボランティア活動と旅行を含む活動を新たなツーリズムの形として認識している研究の傾向や特徴を明らかにしたいと考えたため、本研究での検索基準は先述の通りとした。

加えて、論文数の分析には含めなかったが、研究者による学術的なボランティアツーリズムについての英語書籍<sup>10</sup>も、考察では対象とした。その理由は、同分野での研究の蓄積が限られており、学術文献の中でこれらの書籍が他の研究に与える影響が大きく、分析対象となった論文でも多く引用されているためである。

- ▶6 Hall (2010) に掲載されている専門家パネルの評価とは、英国のAssociation of Business Schools (2009年と2010年)、オーストラリアのAustralian Business Deans Council (2010年)、Australian Research Council (2009年) による評価である。それぞれ4段階評価の上位2段階に該当する学術誌を対象とした。
- ▶7 *Journal of Tourism Studies* については、2000-2005年の内容を対象に、個別に検索した。
- ▶8 この特集号は、「1.1. 研究の目的と背景」で言及したシンガポールでの国際会議で発表された研究に基づく論文を掲載している。
- ▶9 日本語の観光関係学術誌には、2010年9月30日時点でボランティアツーリズムにかんする査読論文は掲載されておらず、ボランティアツーリズムにかんする学術的な書籍も発行されていないため、以下の分析には日本語の文献は含まれていない。
- ▶10 全体または該当書籍の1章以上がボランティアツーリズムについて書かれている書籍を対象とした。

## 2 | ボランティアツーリズム研究の傾向

本章では、上記の基準で抽出された論文の研究の傾向を分析する。そのために、まず、全体の論文数の傾向を示した。次に、研究対象となった主体ごとに論文を分類し、主体ごとの研究テーマの内容を詳しく述べた。加えて、研究方法や研究対象となった団体の活動内容などをまとめ、最後に

考察を加えた。

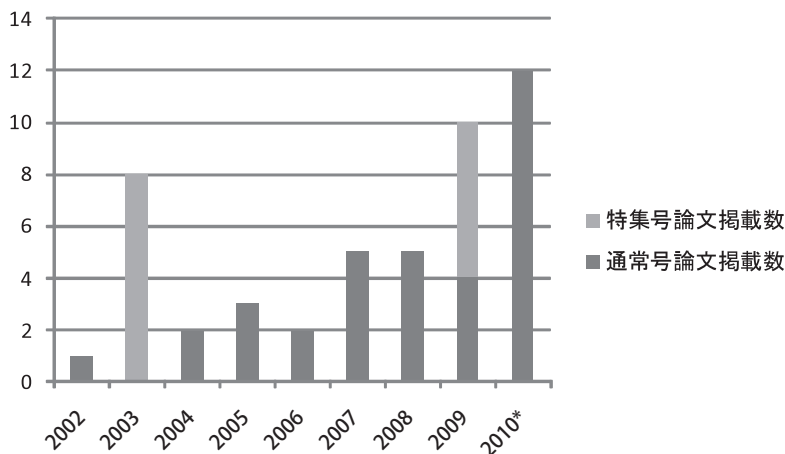
## 2.1. 論文数の傾向

本研究で対象とした学術誌に、ボランティアツーリズムにかんする論文が初めて掲載されたのは2002年である。しかし、その前年には「ボランティアツーリズム」という言葉を初めて書名に用いた著作をWearingが出版している。この著作についての書評が複数の学術誌に掲載されたことや、2003年に*Tourism Recreation Research*がWearingを編集責任者としてボランティアツーリズムの特集を組んだことで、ボランティアツーリズムという新しい形のツーリズムが、研究者にも認知されたと思われる。

ボランティアツーリズムにかんする論文の掲載数は、増加傾向にある(図1)。2004~2006年には毎年2~3論文、2007~2008年には各5論文、2009年は*Annals of Leisure Research* (以下、ALR)の特集号を除くと4論文、ALRの特集号を含めると10論文となった。また、その間には、2008年に2冊目のボランティアツーリズムにかんする学術書籍が出版された<sup>11)</sup>。さらに、2010年は、9月30日現在までに12論文が発表されているが、これは、特集号を含めた過去の年間論文数を上回る水準である。なお、2010年9月30日までの累積論文数は48論文であった。

▶11 Lyons, K., and Wearing, S. (Eds.) (2008) *Journeys of Discovery in Volunteer Tourism*, Wallingford, U.K.: CABI Publishingを指す。

■ 図1 ボランティアツーリズム論文数の推移



出所：著者作成 \* 2010年は9月30日までの数字である。

▶12 運営団体や仲介団体はホストコミュニティの一部である場合もあるが、それらの団体だけを取り上げ分析している場合は、ホストコミュニティには含めず、運営・仲介団体として取り扱った。また、ある主体の分析を例として用いて、一般論を論じている論文は、個別主体の区分には含めず、その他に含めた。

▶13 『観光学大事典』(香川真編 2007) 木楽舎などを参照。

## 2.2. 研究対象主体ごとの研究テーマ

次に、各論文を研究対象となる主体ごとに、「ボランティアツーリスト」、「ホストコミュニティ」、「中間組織(運営・仲介団体)」、「複数の種類の対象主体」、「その他」に分類し<sup>12)</sup>、論文数の経年変化を表1にまとめた。この分類は、ツーリズムシステムを構成している基本的な主体<sup>13)</sup>である「ゲスト(ここではボランティアツーリスト)」、「ホスト(同ホストコミュニティ)」、「ブローカー(同中間組織)」に基づいたものである。加えて、ツーリスト、ホスト、中間組織のうち、2つ以上にかんする研究は、別途、「複

数の種類の対象主体」とした。研究テーマが主体の分析に該当しないものは、「その他」とした。

合計数では、ボランティアツーリストにかんする研究は23論文と、全体の半分近くとなった。複数の種類の主体についての研究は6論文、中間組織にかんする研究は4論文、ホストコミュニティにかんする研究が2論文だった。また、その他が13論文あった。

以上の内訳から明らかなように、本研究の対象となった論文では、ボランティアツーリストについての論文が多かった。その傾向は、特集号においてより顕著である。一方、中間組織とホストコミュニティについての研究は、数も少なく、他の主体の研究に比べると最初の論文が発表されたタイミングも遅い。

■表1 研究対象となった主体ごとの論文数の傾向

研究対象主体	年	2002	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010 (9月まで)	合計	(構成比、 %)
ボランティア ツーリスト		1	5 (5)	1	2	0	1	0	6 (4)	7	23 (9)	48 (64)
ホスト コミュニティ		0	0	0	0	0	0	0	1	1	2	4
中間組織 (運営・仲介団体)		0	0	0	0	0	1	2	1 (1)	0	4 (1)	8 (7)
複数の種類の 対象主体		0	0	1	0	2	2	0	0	1	6	13
その他		0	3 (3)	0	1	0	1	3	2 (1)	3	13 (4)	27 (29)
合計		1	8 (8)	2	3	2	5	5	10 (6)	12	48 (14)	100 (100)

出所：著者作成 \*特集号に含まれていた論文数はカッコで内数として示した。

これまでに、主体ごとの論文数の傾向を分析してきたが、これだけでは研究内容の理解には不十分である。そこで、次項では、主体ごとの研究の内容をさらに詳細に分析する。

### 2.2.1. ボランティアツーリストにかんする研究テーマ

最初に、ボランティアツーリストにかんする論文の研究テーマと特徴をまとめる。主な研究テーマは、①「参加動機 (以下、動機)」、②「ボランティアツーリズムの体験 (以下、体験)」、③「ボランティアツーリズム参加後の影響 (以下、影響)」、④「需要調査」、⑤「ボランティアツーリストの社会的意義 (以下、社会的意義)」であった。ボランティアツーリストにかんする23論文のうち、体験と動機にかんする論文がそれぞれ14論文と12論文と多かった<sup>14</sup>。それ以外では、影響が5論文、需要調査が4論文、社会的意義が1論文あった。

また、ボランティアツーリストを対象とした研究では、ひとつの論文で複数のテーマを扱っている場合も多い。体験と動機の両方を分析している

▶14 ひとつの論文で複数のテーマを取り扱っている場合は、それぞれのテーマに含めて数えた。従って、テーマごとの分類の合計数は主体ごとの論文数の合計より大きくなる。

研究が最も多く、10論文あった。それ以外には、体験と影響を分析しているものと、動機、体験、影響を分析しているものがそれぞれ1つずつあった。特に研究テーマが複数にわたる論文の多くは、特定のツアーの参加者を研究対象として取り上げ、参加した理由と実際の体験やその後の影響を分析していた。

動機、体験、影響については、次のような考察を特筆すべきである。まず、動機にかんする研究では、ホストコミュニティへの貢献という「利他的な動機」の有無が多くの研究で論じられているが、実際には多くの研究が「利己的な動機」の重要性を結論として指摘している (Coghlan et al., 2009)。次に、体験にかんしては、参加者の自己発見や自己成長、社会や世界にかんする理解や意識の変化 (たとえば、Broad, 2003; Harlow et al., 2007; Lo et al., 2010など) をボランティアツーリズムの特徴として挙げている。最後に、影響については、ツアー参加前後の意識や行動の変化、特に社会貢献についての意識や行動の変化の程度が議論の焦点となっている。

一方、需要調査にかんする研究では、特定のマーケットセグメントを取り上げ、ボランティアツーリズム参加の可能性や参加を促進するための要件を分析している。具体的に対象となったセグメントは、バックパッカー (Ooi et al., 2010) やグレイノーマッド<sup>15</sup> (Leonard et al., 2009) などである。これらの研究では、需要の規模や特徴の分析以外に、ボランティアツーリズムの社会的な意義や可能性についても言及している<sup>16</sup>。

最後に、社会的意義にかんする研究では、災害復旧活動におけるボランティアツーリズムの意味をボランティアツーリストの災害地との関わり方から論じている。

### 2.2.2. ホストコミュニティにかんする研究テーマ

ホストコミュニティにかんする研究は2論文だったが、どちらもホストコミュニティのボランティアツーリズムに対する認識についての研究であった。1つは、特定団体関係者と地域住民の持つ認識を分析した上で、ボランティアツーリズムがホストコミュニティに受け入れられるための要件を社会的交換理論<sup>17</sup>に基づいて論じた (McGehee et al., 2009)。もう1つは、ホストコミュニティ内の複数の活動団体の関係者や地域住民の認識を分析し、責任ある観光 (responsible tourism) としてのボランティアツーリズムを論じた (Sin, 2010)。

### 2.2.3. 中間組織にかんする研究テーマ

中間組織にかんする研究は、2つの異なるテーマの研究を含んでいる。1つはボランティアツーリズムの社会的意義や役割、もう1つは中間組織経営である。

ボランティアツーリズムの社会的意義や役割にかんする研究では、「正義のためのツーリズム (justice tourism)」としてのボランティアツーリズムの可能性が論じられている (Higgins-Desbiolles, 2009)。一方、中間組織経営にかんする研究では、①中間組織における人材育成の課題 (Coghlan,

▶15 ここでは、グレイノーマッド (Gray nomads) を、オーストラリアを長い期間 (extended period) 旅行する50歳以上の旅行者と定義している。(Onyx et al., 2007)。

▶16 例えば、Ooi et al. (2010) は、ボランティアツーリズムを「急激に増加しているバックパッカー」を、持続可能なツーリズム体験に促す方法のひとつだと論じている。

▶17 社会的交換理論は、「交換」の観点から社会を分析する理論で、ツーリズム研究ではホストコミュニティ住民の分析に用いられることが多い。詳しくは、McGehee et al. (2009) を参照。



2008)、②ボランティアツーリストの異文化理解促進のための、中間組織による教育などの課題 (Raymond et al., 2008)、③広告内容のイメージに基づく中間組織の類型化 (Coghlan, 2007) が論じられた。

#### 2.2.4. 主体が複数にわたる論文の研究テーマ

次に、論文の対象となった主体が複数にわたる論文について分析する。まず、主体の組み合わせごとの論文数だが、①中間組織とボランティアツーリストを対象とした研究は3論文、②ホストコミュニティとボランティアツーリストを対象とした研究が2論文、③ホストコミュニティ、中間組織、ボランティアツーリストを含む研究が1論文あった。

中間組織とボランティアツーリストを対象とした論文は、どれもボランティアツーリストの現状とその現状に対する中間組織の対応について論じている。その内容は、①ボランティアツーリストの「正しい現地理解」のための中間組織による教育の重要性 (Simpson, 2004)、②中間組織の広告に対する潜在顧客の認識と、潜在顧客の学歴とボランティアツアーの選好の関係 (Coghlan, 2006)、③ボランティアツーリストがツアーに持つ期待と、ボランティアツーリストと中間組織との関係性 (Blackman et al., 2010) である。

一方、ホストコミュニティとボランティアツーリストを対象とした論文は、ホストコミュニティとボランティアツーリスト双方のボランティアツーリズムに対する認識を分析している。2論文のうちの一方は、研究対象となった環境調査のためのボランティアツアーを新しいタイプのエコツアーと捉え、従来のエコツアーに対する認識と比較している (Clifton et al., 2006)。

また、ホストコミュニティ、中間組織、ボランティアツーリストを対象とした論文では、ボランティアツーリズムの美的、経済的、倫理的価値に対する各主体の認識を明らかにしている。さらに、その認識の共通点と差異を整理している (Gray et al., 2007)。

#### 2.2.5. その他の研究テーマ

次に、特定主体の分析ではないその他の論文の研究テーマをまとめた。その他の論文の研究テーマは大きく3つに分かれた。それは、①ボランティアツーリズムの概念と社会的意味・役割、②研究方法や研究の方向性にかんする提言、③経営にかんするテーマ、である。①については6論文、②は4論文、③は3論文が該当する。

ボランティアツーリズムの概念についての論文では、これまでのツーリズム概念の研究を踏まえ、ボランティアツーリズムをポストモダン観光 (Uriely et al., 2003) や巡礼 (Mustonen, 2005) などとして論じているほか、従来のマスツーリズムと変わらない新植民地主義<sup>18</sup> (Butcher et al., 2010) ではないかという指摘もある。ボランティアツーリズムの社会的意味・役割にかんしては、平和構築のための手段 (Higgins-Desbiolles, 2003) や文化交流 (Palacios, 2010) としての有効性を論じる研究がある一方で、社会

▶18 山下晋司、船曳健夫編 (2008) 『文化人類学キーワード [改訂版]』、有斐閣を参照。同書によれば、新植民地主義とは、「植民地が独立した後も、旧宗主国が隠然たる経済的・政治的影響力をふるい、前者を従属的な状況にとどめておく状況」ことである。

- ▶19 Appreciative Inquiry (AI) とは、ホールシステムアプローチと呼ばれる対話の一手法である。詳しくは、Raymond, E. & Hall, C. (2008) を参照。
- ▶20 Smith et al. (2009) にはHolmesが、Holmes et al. (2010) にはSmithが共著者として加わっている。2つの論文は、同様の分析フレームワークについて提言をしている。

変革や開発、社会貢献手段としての限界 (Butcher et al., 2010; Palacios, 2010) も指摘されている。また、ボランティアツーリズムの社会変革手段として機能を有効に活用するために、ボランティアツアーへのフェアトレード制度導入を提言する論文もあった (Mdee et al., 2008)。

研究方法にかんする論文では、分析手法としてのAppreciative Inquiry (AI)<sup>19</sup> の導入 (Raymond et al., 2008) や、ツーリストとホスト双方のボランティアを同じ分析フレームワークで分析する可能性 (Uriely et al., 2003; Smith et al., 2009; Holmes et al., 2010<sup>20</sup>) が論じられた。また、研究の方向性については、ボランティアツーリズムの負の可能性に注目する必要性が指摘されている (Guttentag, 2009)。

経営にかんする論文では、ボランティアツーリズムの経済効果 (Ellis, 2003; Brightsmith et al., 2008) の分析があった。また、それ以外では、特定の市場の規模や顧客についての研究 (Cousins, 2007) があった。

### 2.3. 採用された研究方法

次に、分析対象とした48論文で採用された研究方法を分析する。最も多く採用された研究方法は、対面でのインタビューや参与観察など、研究者による直接的なデータ収集を含んだ質的研究<sup>21</sup>である (24論文<sup>22</sup>)。次に多いのは、インターネット調査を含む調査票調査 (12論文) と、文献調査 (10論文) であった。

- ▶21 質的研究には、エスノグラフィーやグラウンデッド・セオリー・アプローチなどを含む。
- ▶22 複数の研究方法を組み合わせている論文もあるため、ここで言及されている数字の合計は、対象論文数を上回る。

加えて、運営団体や仲介団体のパンフレットやウェブサイトのコンテンツ分析による研究が3論文あった。また、定量分析は調査票調査に含まれる2論文であった。

### 2.4. 研究対象となった団体の活動内容

本研究で対象とした48論文では、不特定多数を対象にした調査よりも、特定の運営・仲介団体の活動の関係者 (主催者や参加者など) を対象とした研究が多かった (29論文)。そのような団体の活動内容を分類すると、11論文は環境保全活動を行っていた<sup>23</sup>。また、それ以外では、建設や地域における起業支援などのコミュニティ開発 (8論文)、孤児院補助などの福祉活動 (5論文)、キャンプカウンセラーなどの教育補助 (3論文) などがあった。その他としては、史跡調査、イベント補助、農業補助、平和活動などがあった。また、論文から活動を特定できないものが4論文あった。

- ▶23 具体的な活動内容が明らかで、複数の活動をしている団体がある場合は、それぞれの分類に含めて数えた。

### 2.5. ボランティアツーリストの活動実施地域と出発地

次に、本研究で対象となったボランティア活動が実施された地域とボランティアツーリストの出発地を分析する。ただし、ボランティアツーリストの出発地については、出発時の居住地か国籍かの表記がない場合や、ある場合でも各論文での表記の統一がされていないため、厳密に集約することはできなかった。それぞれの論文で出発地または国籍として述べられていた国名や地域名を集約した。

まず、活動実施地域だが、それらの地域は分散しており、中南米、アフリカ、アジア、豪州がそれぞれ5論文ずつ、北米が4論文、中近東が2論文あった。加えて、複数の地域を対象としている活動は6論文あった。

次に、研究対象となった活動のボランティアツーリストだが、その多くはヨーロッパ、北米、豪州からの参加者であった。ボランティアツーリストについての論文で研究対象となったボランティアツーリストも、これらの地域からの参加者がほとんどであった。その理由としては、本研究の対象となった論文の著者らの多くが、それらの地域を拠点とする研究者であることの影響があると考えられる<sup>24</sup>。ボランティアツーリストの出発地または国籍が明らかになっている研究のうち、北米からのツーリストを対象としたものが12論文、欧州が10論文、豪州が8論文となった<sup>25</sup>。アジアのボランティアツーリストを対象とした研究は、2009年に発表されたシンガポールの1論文と、2010年に発表された香港の1論文だけである<sup>26</sup>。

### 3 ボランティアツーリズム研究の特徴

前章では、個別論文の論文数の傾向や研究テーマについて整理してきた。次に、これまでの分析を踏まえ、ボランティアツーリズム研究全体の特徴を考察する。ボランティアツーリズム研究には、以下の4つの特徴がある。

第1の特徴は、先述の通り、ボランティアツーリストへの影響にかんする論文が多かったことである。その理由としては、様々な構成員から成るホストコミュニティに比べ、ツーリストは特定しやすいといった実務面での調査のしやすさや、ボランティアツーリストが急増したことについての社会的関心の高まりなどが挙げられる。しかし、中でも、「体験」にかんする研究が一番多かったことは、ボランティアツーリズムが個人に与える影響への関心の高さを表していると考えられる。

ボランティアツーリストの「体験」についての研究では、ボランティアツアー期間に、参加者の自己や世界に対する理解や意識がどのように変化したかということが、重要なテーマであった。さらに、ボランティアツアー参加後の影響を分析した「影響」にかんする論文も5論文あった。これらは、どちらもボランティアツアーが個人に与える変化についての関心に基づく研究である。ボランティアツーリストの「体験」と「影響」にかんする論文は合計で18論文<sup>27</sup>あり、ボランティアツーリストにかんする論文の過半であった。

第2の特徴としては、ボランティアツーリズムの社会的意味・役割にかんする論文も、ボランティアツーリストの「体験」や「影響」には及ばないものの、多かったことが挙げられる。前述したように、「その他」に分類された論文では、ボランティアツーリズムの「概念や社会的意味・役割」

- ▶24 ボランティアツーリストにかんする公式な統計は存在しないため、実際のボランティアツーリストの分布との比較は難しい。ボランティアツアーの仲介や受付をしている団体の本拠地の分布が参考になると考えられるが、Tourism Research Marketingではインターネットでボランティアツアーを仲介または受付している団体の国別分布について調査している (Tourism Research Marketing 2008)。受け入れ団体がほとんどと考えられる発展途上国を除くと、その大半は、北米と欧州に本拠地を置く団体であった。また、次に団体数が多いのは、豪州であり、本研究で示された三大出発地と同様の地域であった。
- ▶25 参加者の出身地別内訳が複数にまたがる場合は、その内の30%以上を占める地域や「大半」と示されている地域を数えた。その結果、一つの論文が複数の地域に分類されている場合がある。また、本文中の分類以外に、「西洋 (western countries)」が1論文あった。
- ▶26 ボランティアらは、現地で複数国出身メンバーからなるチームで働くことも多い。その中に、アジア人が含まれる場合はあるが、アジアの国で結成されたツアーグループを取り扱った研究は、ここで言及されている2論文だけである。
- ▶27 「体験」と「影響」の両方を分析した研究が1論文あったが、それは1論文と数えた。

- ▶28 ここでの「商業主義的なツーリズム」とは、市場経済主義に基づきツーリズム産業の利益を最大化するために、ホストコミュニティの資源の搾取を招くようなツーリズムを指す。
- ▶29 「第三の空間」については、Bhabha, H. K. (1994) *The Location of Culture*, New York, Routledge (『文化の場所 ポストコロニアリズムの位相』2005、本橋哲也ら訳、法政大学出版会)を参照。

についての論文が一番多かった。加えて、ボランティアツーリストや中間組織にかんする論文でも、ボランティアツーリズムの社会的役割を検討しているものがあつた。具体的には、平和構築の手段 (Higgins-Debiolles, 2003)、社会活動参加の促進手段 (McGehee et al., 2005) などである。

さらに、今回分析対象とした論文以外でも、ボランティアツーリズムをこれまでの商業主義的なツーリズム<sup>28</sup>を変えるきっかけとして、Wearing (2001) は論じている。加えて、Wearing et al. (2009) は、ホストとゲストのどちらかの文化が優位に立つ従来のツーリズムにおける関係ではなく、両者の文化が融合する「第三の空間<sup>29</sup>」としてのボランティアツーリズムの可能性を論じている。このように、ボランティアツーリズムがどのように社会を変革できる可能性があるかについての研究が多かった。

第3の特徴としては、ボランティアツーリズムが個人や社会を変革する可能性について、事例報告やそこから導き出される可能性の議論だけではなく、これまでに導き出された結論について、直接的に議論し合う論文が出てきたことが挙げられる。具体的な例としては、ボランティアツーリズムがツーリズムや同研究に与える影響についての議論が、WearingとGrayらの間で2007年から2009年に、また、ButcherらとWearingの間で2010年にあつた。

WearingとGrayらの議論では、Wearing (2001) が提起した、ボランティアツーリズムが個人や社会を変革する可能性に対し、Gray et al. (2007) は否定的に議論をした。それに対し、Wearing et al. (2009) は特別な技術が必要としない活動に従事する短期型の「浅い」ボランティアツーリズム (Callanan et al., 2005) は従来のツーリズムと変わらない可能性が高いと認める一方で、より大きな影響を参加者に与えられ「深い」ボランティアツーリズムが、ツーリズムや同研究の商業主義を変える可能性については反論している。

ButcherらとWearingの議論では、Butcher et al. (2010) は、ボランティアツーリズムは貧困などの社会的問題を根本的に解決するような変革手段ではなく、その場しのぎの解決を提供する「立派な慈善活動」でしかないと主張した。Wearing (2010) は、それに対し、ボランティアツーリズム研究の蓄積の少なさに言及し、ボランティアツーリズムを社会学や政治学などの理論を活用して、より広い観点から分析することや、ボランティアツーリズムがボランティアに与える影響を考慮すること、「利他」についての研究を踏まえ、さらに議論を続けることを提案している。

第4の特徴は、ボランティアツーリズムが個人や社会の変化を促すために有効だと考えられる具体的な方法についての提言が出てきたことである。たとえば、社会活動参加の促進手段としてのボランティアツーリズムの実現には、ツアー後のネットワーク作りが重要であるとの指摘や (McGehee et al., 2005)、異文化理解を促進するためには、ツアー中に加え、ツアー前後のプロアクティブな学習が必要であるとの指摘 (Raymond et al., 2008) などである。これは、ボランティアツーリズムは個人や社会を変える可能性があると考えている研究者らが、その可能性をメリットのあ

る形で実現するための方策に、関心を広げていることを示唆している。

最後に、以上の特徴をまとめると、ボランティアツーリズムが個人や社会を変える可能性についての研究者らの関心が強いということがわかる。しかし、これまでのツーリズム研究では、短い滞在期間や、ホストコミュニティの人々との交流の欠如、現地の言語や文化に対する理解不足などを理由に、「ツーリズムでは個人は変化しない」との主張もあった（たとえば、Bruner, 1991）。それに対し、ボランティアツーリズム研究者らが、同ツーリズムが個人や社会を変える可能性に強い関心を持っているのは、ボランティアツーリズムにはホストコミュニティとの直接的な相互作用があることが根拠となっている（Wearing, 2001）。

しかし、その可能性については、支持する研究結果も多いものの、意見が分かれているのは先述の通りであり、今後もボランティアツーリズム研究の中心的な論点となっていくと考えられる。それは、そのような関心は、本研究の対象期間の最終年である2010年においても高く、研究の蓄積が今後も進んでいくと考えられるためである。2010年1月から9月では、個人や社会を変える可能性をテーマにした、ボランティアツーリストの「体験」や「影響」、およびボランティアツーリズムの社会的意味・役割にかんする論文が、同期間に発表された論文の半数であった。

## 4 | ボランティアツーリズム研究の課題

この章では、これまでに明らかとなったボランティアツーリズム研究の傾向や特徴を踏まえた上で、ボランティアツーリズム研究の課題を検討する。ここで重要と考えられる課題は4点ある。

第1に、複数の主体を含むシステムとしてのボランティアツーリズムの分析の充実が必要である。先述の通り、これまでの研究は、個々の主体を別々に分析したものが多かった。しかも、対象となった主体にも偏りがあり、ボランティアツーリストにかんするものが多い一方で、ホストコミュニティや中間組織を含めた研究が少なかった。さらに、複数の主体を含めた論文は少なかった上に、それらの相互作用を分析した研究はほとんどなかった。

しかし、ボランティアツーリズムは、オルタナティブツーリズムの一形態として、ホストとゲスト双方にメリットのあるツーリズムとして期待されている。オルタナティブツーリズム研究では、ツーリズムの異なる段階ごとに、ホストとゲストの相互作用を含めた全体としての（holistic）研究が重要であると言われている（Stronza, 2001）。それは、単にホストコミュニティや中間組織の研究を増やすということではなく、異なる主体間の相互作用、つまりシステムとしてのツーリズムを分析することや、一時点

ではなく、一定の期間に生じる関係性の変化の分析の重要性を指していると考えられる。

第2に、ボランティアツアーが実施される背景に関連付けた研究が必要である。これまでの研究では、個別のボランティアツアーが実施された背景についての分析はほとんどなかった。しかし、ボランティアツーリズムの持つさまざまな可能性を検討するためには、地域内のボランティア（だけ）ではなく、地域外からのボランティアツーリストを採用した理由や、ボランティアツーリストが参加する活動の目的を理解することが重要である。つまり、ボランティアツーリズムの意味や役割を、それだけで理解するのではなく、実施団体の目的や置かれた状況との関連で理解することが重要である。

たとえば、Palacios (2010) の発展途上国のストリートチルドレン支援の事例では、開発としてのボランティアツーリズムの有効性に疑問が呈されているものの、異文化交流としては有効であることが指摘されている。これらの指摘に加え、さらに、実施団体がボランティアツーリズムを採用した背景や目的が明らかであれば、ボランティアツーリズムの持つ複数の機能をどのように実施団体の課題解決に役立てるかについての議論や、これまで注目されていなかった機能への関心が高まる可能性がある。このように、ボランティアツーリズム研究に、実施団体の活動全体からの視点を加えることは、特に、ホストコミュニティがボランティアツーリズムの活用を考える際に有用であると考えられる。

しかし、先述の通り、実施団体の活動全体におけるボランティアツーリズムの位置付けを明らかにした上で、その効果を分析した研究はほとんどない。例外としては、ボランティアツーリズムを安価な労働力提供源と位置付け、経済効果を分析した研究 (Ellis, 2003) がある。

第3の課題としては、ボランティア、ツーリズム、ボランティアツーリズムそれぞれの既存研究との比較研究の充実が必要だと考えられる。これまでは、そのような比較研究はほとんどなく、ボランティアツーリズムの個別の事例の特徴が明らかにされただけであった。ボランティアツーリズム研究間の比較としては、Coghlan (2007) が行ったボランティアツーリストの動機にかんする論文が唯一の比較論文である。また、ボランティアツーリズムと他の形態のツーリズムの比較としては、Ooi et al. (2010) がバックパッカーと、Mustonen (2005) が巡礼と比較をしているだけである。また、他の形態のボランティアとの比較をした実証研究はまだない。Smith et al. (2009) と Holmes et al. (2010) がツーリストとホスト側のボランティアを同じ分析フレームワークで分析することを提唱しているにすぎない。

比較研究の充実が必要なのは、そのような研究がボランティアツーリズムの体系的な理解を促進すると考えられるためである。ボランティアツーリズムは、多様な参加者、ホスト、中間組織、活動内容、期間などからなっており、その特徴を一概に論じることは難しい。従って、比較研究により、多様なボランティアツーリズムの共通点や差異を整理し、特徴の体系

化を進めることは、同ツーリズムの理解と実践への適用を促進すると考えられる。さらに、研究の蓄積が先行しているツーリズムやボランティア研究にボランティアツーリズムを位置付けることで、ボランティアツーリズム間の比較だけでは明らかにならなかった、同ツーリズムの特徴が理解できると考えられる。

最後の課題としては、ボランティアツーリズムを促進する社会的背景についての研究の必要性が挙げられる。これまでの研究では、ボランティアツーリズムを1つの社会現象として捉え、その成長の社会的背景を論じた研究はほとんどなかった。Gap Year学生の増加という背景は指摘されているが (Callanan et al., 2005)、Gap Year世代以外の参加者の増加や、Gap Yearが一般的でない地域でのボランティアツーリズムの広がりなどの社会的背景を分析した研究はほとんどない。

しかし、ボランティアツーリズムを一つの社会現象として捉え、個人やホストコミュニティをボランティアツーリズムへ向かわせる社会的背景を分析することは、現代社会の持つ課題を明らかにする可能性がある。それは、ボランティアツーリズムを促進する背景には、ボランティア活動に関連する余暇や労働、福祉、教育などにかんする課題や、ツーリズムに関連する居住地からの移動の意味、すなわち出発地や受け入れ地での社会的、政治的、経済的、文化的課題などが関係している可能性が高いためである。こうしてボランティアツーリズムの社会的背景と、それにより示唆される課題を明らかにすることは、現代社会におけるボランティアツーリズムの意味や役割の理解につながると考えられる。

## 5 | 終わりに

本研究は、学術文献データベースから一定の基準でボランティアツーリズムにかんする論文を抽出し、ボランティアツーリズム研究の傾向と特徴について分析した。その結果、ボランティアツーリズムにかんする論文は増加傾向にあり、中でもボランティアツーリストにかんする論文が多いことが明らかになった。また、研究の特徴としては、ボランティアツーリストへの影響やボランティアツーリズムの社会的意味や役割についての論文が多いことや、ボランティアツーリズムが個人や社会を変える可能性についての研究者間の直接的な議論やその実現方法についての提言が始まっていることが明らかになった。こうした特徴は、個人や社会の変化を促す手段としてのボランティアツーリズムに対する関心の高さを示していると考えられる。

本研究では、こうしたボランティアツーリズム研究の傾向や特徴を踏まえ、ツーリストとホストコミュニティ双方にメリットをもたらすボランテ

▶30 ProQuestの論文検索では、ボランティアツーリズムにかんする博士論文は、2005年、2006年に1論文ずつだったが、2009年には3論文になっている。2010年は9月30日現在で1論文である。

ボランティアツーリズムを実現するために、ボランティアツーリズム研究に必要とされる課題を検討した。今後の課題としては、①複数の主体を対象とし、それらの相互作用を含めたシステムとしての研究、②活動の実施団体がボランティアツーリズムを採用した背景や目的と関連付けた研究、③ボランティアツーリズム間の横断比較や異なる形態のツーリズムやボランティアとの比較研究、④ボランティアツーリズムを一つの社会現象と捉え、同ツーリズムを促進する社会的背景を明らかにする研究が必要なことを述べた。

しかし、本研究の課題としては、一定のルールに基づき、文献を抽出したため、それ以外の文献が考察できていないことが挙げられる。たとえば、ボランティアツーリズムを取り扱う博士論文の数は増加する傾向<sup>30</sup>にあるが、それらを対象に含めることはできなかった。また、エコツーリズムなど、他の形態のオルタナティブツーリズム研究との違いや、国際ボランティア研究との違いを論じることもできなかった。これらについては、今後の課題としたい。

最後に、本論文で挙げた研究課題に加え、多様な事例研究の蓄積も引き続き必要であることに触れたい。先述の通り、ボランティアツーリズム研究の蓄積はまだ限られている。例えば、近距離、短期型のボランティアツーリズムについての研究はほとんどないが、このような形態のボランティアツーリズムでは、リピーターの割合が増え、1度限りの訪問者とは異なる関係性が、ホストコミュニティとの間で構築されると考えられる。こうした関係性を検証することは、ボランティアツーリズムの新たな社会的役割の発見につながる可能性がある。

このように、10年あまりの蓄積しかないボランティアツーリズム研究では、新たな知見を提供する可能性が高いものの、まだ研究されていない形態の事例が多く残されていると考えられる。同様のことは、距離や期間の違いに限らず、活動の内容や中間組織の組織形態など、ボランティアツーリズムを構成する様々な要素について当てはまる。従って、本論文で提示した研究課題がより意味のある研究成果を生み出すためにも、今後も多様な事例研究の積み重ねが必要であることを強調したい。

## 参考文献

- Blackman, D. A., & Benson, A. M. (2010). The Role of the Psychological Contract in Managing Research Volunteer Tourism. *Journal of Travel & Tourism Marketing*, 27, 221-235.
- Broad, S. (2003). Living the Thai life-a case study of volunteer tourism at the Gibbon Rehabilitation Project. *Tourism Recreation Research*, 28(3), 63-72.
- Brightsmith, D. J., Stronza, A., Holle, K., & Broad, S. (2008). Ecotourism, conservation biology, and volunteer tourism: A mutually beneficial triumvirate. *Biological Conservation*, 141, 2832-2842.
- Bruner, E. M. (1991). Transformation of Self in Tourism. *Annals of Tourism Research*, 18(2), 238-250.
- Butcher, J., & Smith, P. (2010). 'Making a Difference': Volunteer Tourism and Development. *Tourism Recreation Research*, 35(1), 27-36.



- Callanan, M., & Thomas, S (2005). Volunteer Tourism, Deconstructing volunteer activities within a dynamic environment, In M. Novelli (Ed), *niche tourism, contemporary issues, trends and cases*, (pp. 183-200). Oxford, UK: Butterworth-Heinemann.
- Clifton, J., & Benson, A. (2006). Planning for Sustainable Ecotourism: The Case for Research Ecotourism in Developing Country Destinations. *Journal of Sustainable Tourism*, 14(3), 238-254.
- Coghlan, A. (2006). Volunteer tourism as an emerging trend or an expansion of ecotourism? A look at potential clients' perceptions of volunteer tourism organizations. *International Journal of Nonprofit and Voluntary Sector Marketing*, 11(3), 225-237.
- Coghlan, A. (2007). Towards an Integrated Image-based Typology of Volunteer Tourism Organisation. *Journal of Sustainable Tourism*, 15(3), 267-287.
- Coghlan A. (2008). Exploring the role of expedition staff in volunteer tourism. *International Journal of Tourism Research*, 10, 183-191.
- Coghlan, A., & Fennell, D. (2009). Myth or substance: an examination of altruism as the basis of volunteer tourism. *Annals of Leisure Research*, 12(3, 4), 377-402.
- Cousins, J. A. (2007). The role of UK-based conservation tourism operators. *Tourism Management*, 28(4), 1020-1030.
- Ellis, C. (2003). Participatory Environmental Research in Tourism A Global View. *Tourism Recreation Research*, 28(3), 45-56.
- Gray, N. J., & Campbell, L. M. (2007). A Decommodified Experience? Exploring Aesthetic, Economic and Ethical Values for Volunteer Ecotourism in Costa Rica. *Journal of Sustainable Tourism*, 15(5), 463-482.
- Guttentag, D. A. (2009). The Possible Negative Impacts of Volunteer Tourism. *International Journal of Tourism Research* 11(2009), 537-538.
- Hall, C. M. (2010). Publish or perish? Bibliometric analysis, journal ranking and the assessment of research quality in tourism. *Tourism Management* (2010). doi:10.1016/j.tourman.2010.07.001
- Harlow, S., & Pomfret, G. (2007). Evolving Environmental Tourism Experiences in Zambia. *Journal of Ecotourism*, 6(3), 184-209.
- Higgins-Desbiolles, F. (2003). Reconciliation Tourism: Healing Divided Societies!. *Tourism Recreation Research*, 28(3), 35-44.
- Higgins-Desbiolles, F. (2009). International Solidarity Movement; A case study in volunteer tourism for justice. *Annals of Leisure Research*, 12(3, 4), 333-349.
- Holmes, K., Smith, K. A., Lockstone-Binney, L., & Baum, T. (2010). Developing the Dimensions of Tourism Volunteering. *Leisure Sciences*, 32(3), 255-269.
- Leonard, R., & Onyx, J. (2009). Volunteer Tourism: The interests and motivations of grey nomads. *Annals of Leisure Research*, 12(3, 4), 191-206.
- Lo, A. S., & Lee, C. Y. S. (2010). Motivations and perceived value of volunteer tourists from Hong Kong. *Tourism Management*, In Press, Corrected Proof.
- Lyons, K.D., & Wearing, S. (2008). Volunteer Tourism as Alternative Tourism: Journeys Beyond Otherness. In K. Lyons & S. Wearing (Eds), *Journeys of Discovery in Volunteer Tourism* (pp. 3-11). Wallingford, UK: CABI Publishing.
- McGehee, N. G., & Andereck, K. (2009). Volunteer tourism and the "voluntoured" : the case of Tijuana, Mexico. *Journal of Sustainable Tourism*, 17(1), 39-51.
- McGehee, N. G., & Santos, C. A. (2005). Social change, discourse and volunteer tourism. *Annals of Tourism Research*, 32(3), 760-779.
- Mdee, A., & Emmott, R. (2008). Social enterprise with international impact: the case for Fair Trade certification of volunteer tourism. *Education, Knowledge and Economy*, 2(3), 191-201.
- Mustonen, P. (2005). Volunteer Tourism: Postmodern Pilgrimage?. *Journal of Tourism and Cultural Change*, 3(3), 160-177.
- Ooi, N., & Laing, J. H. (2010). Backpacker tourism: sustainable and purposeful? Investigating the overlap between backpacker tourism and volunteer tourism motivations. *Journal of Sustainable*

*Tourism* 18(2), 191-206

- Palacios, C. M. (2010). Volunteer tourism, development and education in a postcolonial world: conceiving global connections beyond aid. *Journal of Sustainable Tourism*, 18(7), 861-878.
- Raymond, E. M., & Hall, C. M. (2008). The development of cross-cultural (mis)understanding through volunteer tourism. *Journal of Sustainable Tourism*, 16(5), 530-543.
- Simpson, K. (2004). 'Doing development' : the gap year, volunteer-tourists and a popular practice of development. *Journal of International Development*, 16(5), 681-692.
- Sin, H. L. (2009). Volunteer Tourism-- "Involve Me and I Will Learn" ?. *Annals of Tourism Research*, 36(3), 480-501.
- Sin, H. L. (2010). Who are we responsible to? Locals' tales of volunteer tourism. *Geoforum* (2010). doi:10.1016/j.geoforum.2010.08.007
- Smith, K., & Holmes, K. (2009). Researching Volunteers in Tourism: Going beyond. *Annals of Leisure Research*, 12(3, 4), 403-420.
- Stronza, A. (2001). Anthropology of Tourism: Forging New Ground for Ecotourism and Other Alternatives, *Annual Review of Anthropology*, 30, 261-283.
- Thorpe, A. (2009, August 16). Escape: Ethical Travel: How to make volunteering work for you: Paying to work abroad is an increasingly popular-but not always happy-experience so choosing the right placement is crucial, says Annabelle Thorpe. *The Observer*, Observer Escape Pages p. 5.
- Tourism Research and Marketing (2008). *Volunteer Tourism: A Global Analysis*. Barcelona, Spain: ATLAS.
- Trejos, N. (2009, December 13). How can we help?; On a volunteer trip, good intentions can misfire when cultures clash. *The Washington Post* (Every ed.), Travel p.1.
- Uriely, N., Reichel, A., & Ron, A. (2003). Volunteering in Tourism: Additional Thinking. *Tourism Recreation Research*, 28(3), 57-62.
- Wearing, S. (2001). *Volunteer Tourism: Experiences That Make A Difference*. Wallingford, UK: CABI Publishing.
- Wearing, S. (2010). A Response to Jim Butcher and Peter Smith's Paper 'Making a Difference' : Volunteer Tourism and Development. *Tourism Recreation Research*, 35(2), 213-215.
- Wearing, S., & Ponting, J. (2009). Breaking Down the System: How Volunteer Tourism Contributes to New Ways of Viewing Commodified Tourism, In M. Jamal & M. Robinson (Eds), *The SAGE Handbook of Tourism Studies* (pp. 254-268). London, UK: SAGE Publications.

(2010年10月4日受理、2011年1月14日修正原稿受理、2011年2月9日採択)